
のら猫たち

大崎よしこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のら猫たち

【Nコード】
N2351E

【作者名】
大崎よしこ

【あらすじ】
貧しいスラムで、アパートをシェアして暮らしている、おじさんと女性と少年のかけあいです。食事時のひとこまです。

ケーキを買って帰る。

大事に持って帰る。

あいつの喜ぶ顔が見たい。

「ふう。ただいま…」

建てつけの悪い金属のドアを肩で押し開け、イーグルはのそのそと玄関に入った。

「マーク？アリス…？」

アパートはしんと静まりかえっている。

イーグルはぐるぐる巻きにしているマフラーを引つ張ってくつろげながら、突き当りのキッチンに行つて電気をつけた。

どっこいしょ、と白い箱をテーブルに置いて、いつも持っているぼろぼろの鞆は椅子の足元に粗雑に落とす。冷蔵庫を開けてチーズをひとかけくわえ、やかんを火にかけた。寒いのだ。

マークは自分より先に帰っていたし、アリスは今日はオフでイーグルが出勤するときにはパジャマのままクロスワードをやっていた。

だから何だか当たり前に二人がいるような気がしていたイーグルは、ちよつと拍子抜けした。

マークは帰りに酒場にでもしけこんでいるかもしれない。アリスはまたゲームセンターで暇を潰しているんだろうか。

椅子にずりこんで緩めたマフラーに、無精ひげの目立つ顔をうずめると、どつと疲れが出た。

まったく毎日よく働いていると自分でも思う。これと言って使い道もないのに、呆れるほど金が貯まらないのが謎だ。

昔から金とは縁がなかった。

孤児で育ち、底辺をふらふらと漂つて、出会った場末のシンガーを愛した。ただ一緒にいられれば暮らしはささやかでいいと思ってい

たが、結局うまくは行かなかった。決定的に破綻する前に強盗にやられて二人の生活はあっけなく終わったけれど、遅かれ早かれ同じ結果になったはずだ。

俺はささやかでいい、とイーグルは心の中で呟く。

しゃれた服はむずがゆいし、いい食べ物腹を下す。そんなのはなくともいい。いままでの人生にもなかったものだ。

ただ退屈しない仲間が少しと、大切なものをしまっておける引き出しがほしい。

だから、大事にしまっておけないはねつかえりの女は苦手だったが、家に置いておいたって守れない時もあるものだ。

もう顔も思い出せない。赤い唇、そう真っ赤なルーージュで歌っていた…。

「寝てんのか？」

はっ、と目を開けるとマークの顔がすぐそこにあった。

性格も言葉遣いも、ショートの髪型も少年のような彼女だが、至近距離で意外にまつげが長いことに気づいた。

「お。生きてる生きてる」

「…いくら寒がりでも、家の中で凍死はしねえよ」

「でもあたしら帰ってくるのがもう少し遅かったら、あんた丸焼けだったぜ、イーグル」

あれ、とマークが指差す先には、真っ黒になったやかんがある。水が全部蒸発して、やかんが焦げたのだろう。

「今何時だ？」

変な姿勢で寝たせいであちこち軋ませながら尋ねると、白い箱を開けて中身を物色しているアリスが答えた。

「9時すぎ」

「ああ。ちよつとたたねしすぎたな」

「ほんと。マークがもう一軒行こうとしてたグローサリーが閉まってて命拾いしたよな。なあなあ、このケーキどうしたの」

言いながら、アリスはすでに両手に一つずつケーキを取り出してい

る。

「買ってきたんだよ。おい、味わって食べるよアリス。落ち着け」
「腹減ってるもん。いいじゃん、まだいっぱいあるし」

ぼろ、と勢いあまって口の端から転げ落ちたスポンジのかけらを、
クリームだらけの指で拾って口に入れるアリスだ。食べ盛りの十代の
少年にかかる、ほんの二口三口で両手のケーキは幻のように消
えてしまった。

焦げついたやかんを火にかけなおして、マークもケーキの箱を覗き
込んだ。

「おー、奮発してんの！うまそう！食うもん買ってきたけど、いら
なかったなあ」

「いや、いるぞ。アリス、おまえまずはこれを食べ。俺らのケーキ
がなくなっちゃう」

イーグルは大和の買ってきたサンドイッチとホットドックをアリス
に放った。

「いいけど。あ、このシュークリーム俺のね」

「意地きたねえなあ」

呆れるイーグルの横から、ひょいと伸びたマークの手が指名された
ばかりのシュークリームをさらう。

「俺のだって！」

「やだね。おまえさっきチーズケーキ食ったろ」

あたしの一番好きなやつ、としかめつつらを見せて、マークはぺろ
っとシュークリームを胃袋に収めた。

「なに飲むー？」

「コーヒーいれてくれ」

「俺も！」

アリスはすでにサンドイッチを食べ終え、ホットドックを頬張りな
がら、パン屋の袋からさらにクロワッサンを選び出している。

危機感を感じて、イーグルもその袋に手を伸ばした。

三人の仕事場である飛行場への道なりにあるパン屋の袋には、イー

グルが二回に一回買うベーコンマフィンがちゃんと入っていた。マークがインスタントのコーヒーをイーグルとアリスの前に置く。自分はペットボトルのミネラルウォーターだ。

「アリス食い過ぎ。ピーナッツサンドまだある？」

「奇跡的に残ってるぞ。怪物に食われないうちに確保しとけ」

「やつぱりイーグルはそれか。今度あたしも食べてみよっかな」

「いるか？」

食べかけのマフィンを差し出すと、マークは受け取らずにそのままかじった。

「この外側の粉はなんなんだろ。口につくや」

「そっついや、なんだろうな」

「イーグル毎日おんなじもん食ってあきねえの？」

「おまえと違って好きなもんを味わって食うんだ、俺は」

ようやく食欲が収まつたらしいアリスは、ふうん、と興味なさそうにうなづいてコーヒーを飲み干した。

「ていうかほんと、何でケーキ？おっさん一人でケーキ屋行くほど、甘党じゃなかったよな。誰かバースデー？」

「誰かって誰だよ。あたしじゃねえぞ」

「自分で自分にバースデーケーキ買うほど、うら寂しくねえよ」

「そんなこと言って、誰もバースデーにケーキ買ってくれる相手いないくせにさ、イーグル」

「そりゃあおまえ、誰も俺のバースデーを知らないからであってだな……」

「いつ？」

イチゴジャムのデニッシュを食べながら尋ねるマークに、イーグルは「さあ」と気の抜けた返事をした。

「なんだよ、これだから孤児はよ……」

「そっついおまえはいつなんだ、マーク」

「……五月」

「何日？待って、俺どっか書いとく」

日付ひとつくらい覚えるよとイーグルに呆れられながら、アリスはカバンからマジックを取り出した。

「13日だよ」

「オッケー、5月13日つと…」

「おい借家だぞここ！」

アリスが冷蔵庫の横のコンクリートの柱に、マジックで5/13と大きく書いたので、イーグルが慌てて抗議したが遅すぎる。

「いいじゃん。壁紙はなんか剥がれかけてるけど、ここなら消えねえだろ。みんなでパーティーやろうぜ！」

「いいけど、おまえのバースデーも不明なのか？」

マークが訊くと、アリスはあつさり「俺ももれなく孤児だし」と頷いた。

「ニューイヤールで一才年取ることに決めてんだ、俺」

「へえ。じゃああんたはクリスマスにしろよ」

「そんな無関心な口ぶりできめてくれんな」

「俺と5、6日しか違わねえじゃん。つまないから夏にしたほうがよくない、イーグルのは」

「いや、別にいつでもいいがなあ…」

「自分も無関心じゃん」

マークは笑って、クシャクシャに丸めたパン屋の紙袋をゴミ箱に投げた。

「ナイツシユー」

ストリートでバスケットをすると同じように、アリスが口笛を吹いた。

「さー寝よ。あたし明日の朝にするから、バスどうぞ。コーヒー飲んだら洗っとけよ」

マークは大きく伸びをして、カバンをつかんで椅子を立った。

「おう、おやすみ」

「グンナイ」

マークが自室に引き上げたあと、閉まったキッチンのドアを見なが

ら、アリスが呟いた。

「…結局おっさんのバースデーうやむやだし」
「ほっとけ」

おわりです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351e/>

のら猫たち

2010年12月11日13時17分発行